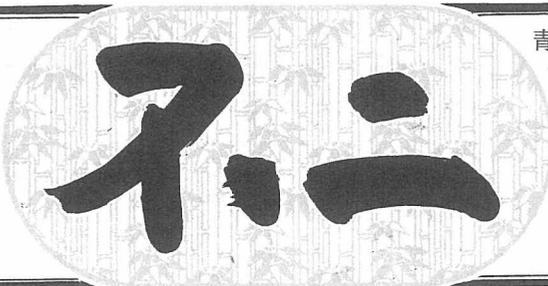


青年僧よ 立ちあがれ、歩め!!

発行所  
臨濟宗青年僧の会  
発行人 宮田正勝  
〒420 静岡市御幸町11の4  
TEL 0542-51-1312  
〒振替 横浜 2-16960



主 な 記 事

新春御垂誡  
宗教者からの  
現代への提言  
藤吉教授に聞く  
この人 この道  
人間国宝荒川豊蔵  
探訪 正眼短大

回先頃、米寿を祝われ、益々矍鑠として  
お過ごしでいらつしやいますが、私達の  
不二新年号にお言葉を賜わりたく参上致  
しました。



新春御垂誡

建仁寺派管長  
竹田益州老師

忍辱精進

私はよく「忍」の字を書きます。

私は、九州は国東半島の百姓の三男と  
して生まれ、随分貧しい幼少を過ごしま

なければいかんと思います。

「忍の徳たること持戒、苦行も及ぶこ  
と能わざる所、能く忍を行ずる者、乃ち  
名づけて有力の大人と為すべし」とい  
う遺教経のことばにあるとうりだと思  
い、このような心がジワジワと理解でき  
ようになっていったのです。

或る時、黙雷老師に「忍」の字の揮毫  
を頼みますと、何故か忍の字を書かず、  
「刻苦光明必盛大也」という八字を書  
いて下さいました。

この黙雷老師の下で、十七年間、辛抱  
しました。

古渡庵老師、即ち、竹田頼川老師は、  
私が役位の際に新命老師で居られまし  
が、大変立派な方で、新命老師として柔  
和に十年間御辛抱されておられました。

修行もありましたが、こういう老師に  
恵まれたこともあって、「忍」というこ  
とを本当によく身に付けさせて頂けま  
した。

刻苦光明必盛大也……。

今では、早や、八十八才になって、こ  
の三年間新命老師に来て頂いてからは、  
その庭にある曹洞宗の道元禪師と同時  
代の仏樹禪師、即ち、明全さんの墓に詣  
で、私があちこちで頂いてきて、適当に  
植樹し育った木々の緑に囲まれ、この木  
々と一緒で、楽も苦も修行と心得、天地  
大自然の壮大なる恩恵に感謝し、自然か  
ら言えば何億分の一のこの八十八才の  
一日一日を静かに生かさせて頂いており  
ます。

回四、五十年の間、雲水さんを見てこ  
られて、その氣質の違いの様なものは感  
じられますか。特に辛抱ということなど……。

今の方々には、「忍辱」なんてことは  
わからんだろうし、一、二度の話しでは  
とても体得できません。忍耐の意味  
も知らないでしょうね。

回絵をよく書かれますが。

絵は、幼少より好きで、尋常小学校の  
時より、ずっと一番でした。特に誰かに  
指導を受けたというのではなく、学校で  
の授業だけで、独学です。好きだったし、  
先生がよく誉めてくれたのも良かったん  
でしょう。

回老師がよく使われる好きな言葉をお  
聞かせ下さい。

四十二章経の「沙門、仏に問う、何者  
か多力なる、何者か最明なる。仏の言く、  
忍辱は多力なり、悪を懐わざるが故に、  
兼て安健を加ふ。忍者は悪なし、必ず人  
に尊ばるる」を提唱等でよく話します。

【不二】とは、禅宗にふさわしい誠に  
良い名前だと感心して承りました。  
富士山のある静岡を事務局としている  
とのこと。富士山は殊に、八方十方と何  
処から見ても名山で二つとない山である  
という意も含んでいると承っております。  
亦、我々人類にとっては「萬事誠意」  
と修行にも通ずることで、二つとない  
という。「一」としてよく聞かされてお  
ります。  
その一つの「吾が道、一を以て是れ  
を貫く」を書く時にも、この人生にとっ  
ても意義ある「不二」の心を大切にし  
ておられます。  
それに、我々人類が八、九十年生きる  
には、富士山のように萬古不易で秀でた  
景色や行ないで、幸福でありたいとい  
うのが、萬人の願ひであります。  
人生に、衣・食・住は欠かせないもの  
で、それらが満たされることを誰もが願  
うが、殆ど満たされない場合が多く、そ  
の事実を、即ち、不眠な衣食住を生活し  
その中に喜びを見出し出している禅門の  
人々は大変に尊いことと思ひます。

した。丁度、日露戦争のさなか、十一才  
の時、或る因縁で、近江は堅田の大徳寺  
派祥瑞寺に小僧として出家したのです。  
この寺は、かの一休禪師も二十歳頃に住  
まわれた格式の高い寺で、境内も七反と  
いう立派なものでしたが、檀家はごく少  
なく、葬式や法事は当然少なく、今迄の  
貧しかった生活に輪をかけて、小僧修行  
の厳しい日が続きました。  
その後、十六才の時、京都に出て大徳  
寺境内の般若林の学生になり、勉学に励  
みました。この頃も、郷里から何も送つ  
てはこないし、随分ひもじい生活でした。  
もつと勉強したかったが、学資の都合で  
進学は叶わず、二十才の春、建仁僧堂に  
掛塔しました。  
僧堂では、鞋資が月に三十五銭か五十  
銭もらえましたが、お粥や何かは食べれ  
ませんでしたから、むしろ、家より楽だと思  
ったこともありませう。  
そんなこんなで、今迄、教えられては  
いたけれどわからなかった「忍辱精進」  
ということが、だんだん、実地に有難く  
思うようになっていきました。辛抱はし

